



立たないに越したことはないが、立つときは跡をできるだけ濁さず・・・

NPO法人子どもセンター「パオ」事務局

弁護士 高橋 直紹

わたしは、弁護士という仕事をしています。社会で起こるトラブルについて法律に基づいて解決できるよう応援する仕事です。おとなの事件も担当することも多いですが、他の弁護士に比べれば子どもの事件が比較的多いと思います。

子どもの事件といっても、少年事件とか虐待事件とか学校問題（いじめとか体罰問題など）とかさまざまです。いま特に力を入れているのが、これから社会に出て行く子どもたちの応援です。平成18年に、NPO法人子どもセンター「パオ」という団体を子どもの事件に関わってきた弁護士たちで立ち上げました。

子どもセンター「パオ」というのは、虐待などによって傷つき、生活のよりどころになる家庭や居場所を失っている子どもたちに、安心と安全の保障された居場所である「子どもシェルター」や「自立援助ホーム」を作って運営している団体です。パオに来てくれる子どもは、中学校や高校を卒業した子が多いです。「パオ」に来てくれた子どもには、「パートナー弁護士」といって、「パオ」を旅立った後も、その子が「もう弁護士はいらない」というまで、ゆるーく関わりながら応援する弁護士がいることがひとつの特徴です。

「パオ」で活動するようになって、いままでごくごく普通に考えていた「仕事」をすること、続けることが、家庭や居場所を失った子どもたちにとっていかに大変かということが分かりました。そもそも住むところが見つからない、賃貸借契約をするにも親権者の同意がいると言われる、仕事が見つからない、見つかっても身元保証人とかになってくれる人がいない、何とか就職できても人間関係がうまくいかなかったりして途中でリタイヤしてしまう、会社の人たちもそんな子どもたちの傷つきや苦しみがなかなか理解できない・・・社会に出て行こうという子どもたちを応援しようとする福祉関係者や弁護士たちはいつもその壁にぶつかってきました。ROOKIE Sはその壁を突き破ってくれるとても大きな存在だと思っています。

子どもの応援というところでは、余り弁護士という肩書きは役に立たず、そんな大したことができるわけではありませんが、そんなわたしでも仕事を始めようとする子どもたちには偉そうに言うこともあります。「仕事ずっとを続けていけるに越したことはないけど、辞めることになったのなら、それはそれで悪いことではない。そのときに、大切なのは終わり方だ。」なあって偉そうに話したりもします。失敗することはたくさんあります。それで仕事が続けられなくなることもよくあります。ケンカして辞めちゃうこともあるかも知れません。それでも、雇ってくれた会社、関わってくれた人に対して、辞める意思表示をちゃんとするなどそれなりの礼儀を尽くしてくれたらいいなと思っています。それが次に繋がるような気がするのです。

子どもの事件をやり始めてもう早いもので20年ほどになりますが、本当に大したことはできていません。でも、これからも、関わってくれた子どもたちからいろんなことを教えてもらいながら、子どもたちの応援ができたらいいなと思っています。